〈更年期〉概念の形成と認識枠組みの変容

——ドイツ 18 世紀末～ 20 世紀初頭の医学言説から——

Changing Paradigms and the Formation of a Concept “Climacteric”:

Medical Discourse from Late Eighteenth-Century to

Early Twentieth-Century Germany

原 葉 子

HARA Yoko

This paper attempts to clarify a paradigm shift connected with the formation of the concept “climacteric” in the modern medicine in Germany that might have paralleled the change of the social and cultural meanings of aging and gender. It will be shown that in the medical literature a discontinuity appeared about the middle of the nineteenth century, and that the concept of “climacteric” in the modern sense as well as a new paradigm were formed in the following period i.e. in the second half of the nineteenth century. Finally it is suggested that the “birth of climacteric” was a consequence not only of the invalidation of the traditional model of human life, but also of the rising concern about the reproduction; both of them required a redefinition of women’s later life.

1. 問題の所在

本稿は、近代医学において「更年期」概念が確立していく過程を捉え、そこにどのような認識枠組みの変容ないし転換があったのかを見ようとするものである。「更年期」とは月経が閉止する前後の期間を指す概念であるが、その定義や経験は、実際には非常に多様かつ曖昧なものであることが指摘されている [Komesaroff 1997; Lock 1993=2005; 山本 2001]。それがどのような文脈で形成されてきたのか、歴史的な観点からの概念の相対化や、概念確立プロセスの再検討が行われていく必要があろう。「更年期」の構築は現代社会の文脈のなかで捉えられることが多く、とくに 1980 年代以降は現代医療による「医療化」を問う議論が数多く出されてきた。「医療化」の重要なメルクマールは、「更年期」(menopause) がエストロゲン欠乏症として定位され、ホルモン補充療法の対象となることであり、臨床レベルでは 1960 年代 [McCrea 1983]、概念レベルにおいては、すでに合成エストロゲンの製造が可能になった 1930～40 年代に始まっていたと指摘されている [Bell 1990]。一方、医学史家の Michael Stolberg は、「更年期障害」(menopausal disorders) はすでに 16 世紀には医学によって深刻な問題として受け止められていたとし、近代初期からの医学の menopause への関与を強調している。彼はとくに、18 世紀末が婦人科医学や産科学の専門職化、大学出の医者への地位上昇、様々な年齢集団特有の生理学的変化や健康リスクに対する医学の関心増大が起こった時期であったと指摘し、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてが menopause に対する医学的関心のひとつのピークであったという考えを示している [Stolberg 1999]。ただし、Stolberg においては menopause の普遍性を強調するあまり、menopause がどのような概念なのかが不問に付されている。「月経の終了」という現象に付随する、ある程度の期間における雑多な一連の現象がひとまとまりのもの

として認識されるには、そこに概念の成立が必要とされるはずで、女性の月経終了時に出現するという症状を現在の概念によって遡及し普遍化することは避けられるべきだろう。

それでは、近代的な「更年期」という概念はいつ頃確立したものだと考えられるだろうか。Joel Wilbush は、menopause という言葉が 19 世紀の始めにフランスの Gardanne によってつくられたことを指摘しているが、menopause という用語の広がりには遅く、イギリスの医学事典にその言葉が載るのは 1880 年代の後半であったという [Wilbush 1979]。また Margaret Lock は、menopause が英仏の医学文献で使われるようになったのと、climacteric がおもに女性の人生の変わり目と結び付けられるようになったのは、ともに 19 世紀後半であるとしている [Lock 1993=2005: 342-3]。ドイツでも、筆者の調べたところでは、19 世紀半ばまで「閉経」や「更年期」という概念を指す一般的な語彙はなく、単に「月経の終了」などと言い表されている。「更年期」についての専門書が現れるのは 1870 年ごろからであり、「更年期」を意味する項目が医学事典に現れるようになるのは、19 世紀末以降のことである。こうしたことから、西洋近代医学における「更年期」という概念の確立期は、19 世紀後半にほぼ措定することができるのではないか。

ここで考えてみたいのは、このような概念の確立がどのような認識枠組みの変容と関連していたのか、ということである。「更年期」の問題はエイジングとジェンダーの交差する地点にあると言える。とすれば、19 世紀半ばから末にかけて、この両者に関わるような価値観の転換があったのではないか。こうした問題関心から、本稿ではとくに 19 世紀後半以降の近代医学を牽引することになるドイツ医学における言説を分析対象として、「更年期」概念の形成プロセスと認識枠組みの変容を考察していくことにしたい。19 世紀後半においては、婦人科医学の専門分化のほか、性科学や精神医学の発達などが起こっており、「更年期」概念形成の契機はさまざまところに見出せよう。もとより、本稿でその全貌を扱うことはできない。ここで焦点を当てようとしているのは、「月経の終了」についての医学言説という限定された枠の中から見える、女性のエイジングをめぐる新たな位相である。

ここで本論に先立って「閉経」または「更年期」という日本語と英語・独語の対応関係について整理しておきたい。International Menopause Society (国際閉経学会) は、“menopause” を「卵胞活動性の停止による、永久的な月経の終了」、また、“climacteric” を「女性のエイジングのなかで、生殖期 (reproductive phase) から非生殖期 (non-reproductive phase) へ移行する局面」と定義している⁽¹⁾。ドイツ語においては前者が Menopause、後者は Klimakterium もしくは Wechseljahre に相当する。日本語では menopause が「閉経」、climacteric は「更年期」と対応すると考えられる。しかし、英語の menopause は往々にして日本語の「更年期」に近い意味で使われている。また「更年期」は「更年期障害」を含意することも多い。これらのことを踏まえ、本稿では煩雑ではあるが、翻訳による混乱を避けるため「閉経」「更年期」を表す語に関してはできる限り原文の表記をそのまま使用する一方、概念としては「閉経」を月経の閉止、「更年期」を「閉経」前後の一定の期間および事象をひとまとまりに指す言葉として使用することにする。

ドイツ語圏における 19 世紀の「更年期」言説に関する先行研究としては、さしあたり Birgit Panke-Kohinke [1998] のものがあげられる。しかし、1772 年から 1996 年までの長期間にわたる「更年期」に関する医学言説を集めたこの著書のなかで、本稿が焦点を当てようとしている「更年期」という概念の確立や、19 世紀における言説の転換について

は分析されていない。本稿では 19 世紀の変化に重点をおき、18 世紀末から 20 世紀初頭にかけてドイツ語で出版された医学書、医学事典、百科事典を一次資料に、次の 2 つの動きを確認していく。まずひとつは、現在ドイツ語で「更年期」を指す Klimakterium という語が、もともとの「厄年」に近い意味から、「閉経」前後を指す医学的な言葉として 19 世紀後半に再定義されていく動きであり、これについて第 2 章で同時代の百科事典の記述から検証する。そのうえで、医学言説のなかで「月経の終了」にまつわる時間と事象がひとつのまとまったものとして形成されていく動きを、医学事典、医学書の記述から分析する。第 3 章では概念確立前の 19 世紀前半までの言説の諸相を 4 つの軸にまとめ、つづいて第 4 章では 19 世紀後半における言説の転換を前章と対応する 4 つの軸に沿って考察する。そして最後に概念形成から見える認識枠組みの転換について検討していくことにする。

2. Klimakterium の語義変容

本章では、現在ドイツの医学用語で「更年期」を表す Klimakterium という語の 19 世紀における変遷過程について、百科事典の定義を通して検討する。この語を扱う理由は、Wechseljahre や Menopause が比較的新しい語であるのに対し、Klimakterium（段梯子を意味するギリシャ語の klimakter を語源とする）はその 19 世紀中の意味変遷が辿れるとともに、それが「更年期」概念の形成過程の一側面をよく示しているためである。ドイツ語圏では 18 世紀から 19 世紀にかけて数多くの国民百科事典が出版されたが、ここではその中でも代表的な Brockhaus 社のものを取り上げる。Brockhaus 百科事典の第 2 版（1812）では、climacterisch（=Klimakterium）が、周期的に訪れる「厄年」に近い概念として掲載されている。

Climacterisch とはひとつの区切り、またはひとつの段階をなす Stufenjahr〔節目の年／厄年〕である。Climacterisch の年は 7 または 9 で割り切れる年であり、たとえば 14 歳、18 歳、27 歳などがそうである。[Brockhaus 1812: 634]

しかしこの記述は、第 4 版（1817）では次のように変わる。

Climacterisch とは生理学上、人間の身体が一定の自然の定めによって、その肉体的な力を減じ、男性は Greisenalter〔老人〕に、女性は Matrone〔年配の女性を指す言葉〕に近づき始める年齢のことをいう。女性の場合はたとえば、月経がなくなるときを指す。[Brockhaus 1817: 596]

ここでは climacterisch は、第 2 版における「人生の各段階にあった転換点」から変化して「老年期への入り口」という限定された意味になっている。また、この「老年期への入り口」が、女性の場合には月経が終わるときであることが示唆されるが、この時点ではまだ語義は男女両性に適用される、性的にニュートラルなものである。しかし、1878 年に出版された第 12 版では、次のように変容する。

Klimakterische Jahre〔=Klimakterium〕とは一般的には、人間のオーガニズムが一定の発達期間を終了したように見受けられ、物質代謝が大きく変化するために生命が危険に脅かされると思われ

図-1 Klimakterium の語義変化

る時期のことを言う。……今日ではこの名称は、基本的には女性の性的機能、とくに月経がなくなり、一連の重要な変化が現れるときのことと理解されている。経血は通常 44 歳から 48 歳で枯渇するが、それが消失することによって、心臓、肺、肝臓といった重要な器官に容易に鬱血が起こる。しばしば長期にわたって神経の不調、粘液漏、下痢、直腸出血、下半身の痛み、大量発汗やその他の不調が続くので、この時期は身体や精神のあり方に慎重な規律が必要である。[Brockhaus 1878: 189]

ここでは、女性の月経が終了するときの意味に比重が大きく傾いている。さらに、Klimakterium が「月経がなくなるとき」だけでなく、それに伴う一連の変化をも包摂した、時間的なスパンの長い概念になっていることに注目したい。

上記のようなプロセスから読み取れるのは、まず Klimakterium という概念の「女性化」である。もともと男女両方に適用されていた Klimakterium という語は、19 世紀後半になって女性特有のものとして特化され、女性の月経の終了時を指すようになる。また、19 世紀初頭まで Klimakterium とは人生の各所に存在した複数の節目だったのであり、これが女性の「閉経」期だけに集約されていく点において、「閉経」というひとつの Klimakterium の「大文字化」を指摘することができる。さらに 3 つ目として、Klimakterium という語が、時間的な広がりを含むようになったことがあげられる。19 世紀初頭までは、Klimakterium は、各人生段階の「区切り目」という意味を色濃く持っていた。たとえば、Klimakterium が「老年期」への入り口とされる場合、それは「成人期」と「老年期」という 2 つのカテゴリー間を区切るメルクマールとしての役割を負わされていたと考えられる。それに対して、19 世紀末における Klimakterium では、「閉経」前後におけるプロセスを包摂した、時間的な広がりを含意されている。またとくに、1878 年のものでは明らかに医学的な記述となっており、「厄年」を示すものとして出発した語が医学用語として取りこまれていったことが窺える。この流れを簡略化して示すと、図-1 のようになる。

3. 「閉経」をめぐる言説——18 世紀末から 19 世紀前半まで——

一方、医学文献の中で「更年期」概念はどのように形成されていったのか。本章では医学事典、医学書における「月経の終了」についての記述の分析を通して、18 世紀末から 19 世紀前半までの医学言説の特徴を、大きく 4 つの軸にまとめ直して考察していく。

(1) 「衰退」概念の両義性

19 世紀の前半において、女性の月経の終了に関する事項は、しばしば Decrepitität (衰退) というカテゴリーにまとめられている。Hans-Joachim von Kondratowicz は、古典的だが、19 世紀のドイツ医学になお色濃く影響を残していた「人生曲線」(Lebenskurve) という自然誌的な概念について論じているが、それによると人生は、前半は昇り、後半は下り

の左右シンメトリーな構造の曲線で示される [Kondratowitz 1989]。それに従ってみると、Decrepitität は、人生の頂点を過ぎた下り坂の時期、すなわち全身の機能が衰えていく時期全体を指しているといえる。「閉経」自体が、Decrepitität というカテゴリーの中で論じられるとき、「閉経」はその上位概念である「衰退」の一部として理解されていると考えられよう。たとえば、Elias v. Siebold は、Decrepitität という項目を次のような文章ではじめている。

女性生殖 (Fortpflanzung) の仕事を成し遂げると、通常、たいてい 40、44、あるいは 48 から 50 歳のあいだに始まる、衰退 (Decrepitität) と性的な枯死の時期にはいる。……月経と、受胎の能力は消え、女性は弱々しくなり、年老い、人生が新鮮で発展が可能な若く力強い少女に場所を譲る。この時期には全オーガニズムの敏感さが消え、身体維持領域の活動や筋肉の力がどんどん減退し、感覚は鈍くなり、オーガニズムのすべてのものが硬直し、年々凝り固まっていく。それゆえ、女性の、通常臀部や仙骨の連結にある、骨盤の軟骨の連結も硬直化する。血管の内径は狭まり、緩慢な血液循環のせいで血管の中に容易に血液の蓄積がおこる。腸管と膀胱の感覚は衰え、老女は便秘がちになり、また排尿が不随意になりがちである。[Siebold 1821: 104]

ここでは、衰退 (Decrepitität) は月経と受胎能力の消失で始まり、老いていく期間をすべて包括する概念である。そのなかで「月経の終了」は、「老年期」というカテゴリーに含まれるとともに、その始まりを告げる象徴的な役割を負っている。その一方で、次のような記述において、Decrepitität の意味は、性的能力の「衰退」に重心が置かれている。

女性の Decrepitität は、女性のオーガニズムにおいて、性的生活が消える経過のことをいう。それは月経の終了、生殖能力の消失、また、生理学ではすでに以前から指摘されている身体における一定の変化により、特徴付けられる。[Busch 1839a: 811]

ここから考えられることは、Decrepitität という言葉は、人生曲線における下降の時期全体を指すとともに、より限定された性的機能の衰退期をも指すという、両義的なものだったのではないかということである。こうした語意の両義性は、「女性の場合、退化の本質は生殖する能力の後退にある」[Busch 1839a: 460] という根拠によって、女性の「老化」と性的能力の後退が同一視されているところから生じてもいるといえるが、その曖昧な含意ゆえに、Decrepitität という語は、「閉経」を人生の後半全体と融合させてしまう。すなわち、月経が終了することによる身体変化や不調と、「老いる」ことによる変化とは、明確に区別されることなく、同じ枠内で論じられるのである。

(2) 逸脱としての「障害」

18 世紀末から 19 世紀前半にかけて、「老年期」(Alter) は衰退の時期ではあったが、そのプロセスが自然のはからい (Natureinrichtung) に適ったもので調和的に起こるのであれば、健康は比較的良好な状態で維持できるとされていた [Brockhaus 1814: 15–6]。『歴史的基本概念事典』によれば、後期啓蒙思想において「自然」(Natur) は絶対的な価値をもつシンボルであり、真実、徳、幸運の秩序を司るものであった。よって自然の法則に従う限り、不秩序や悪、罪などは存在しない [Schipperes 1978: 231–5]。「月経の終了」自体

もまた、「老い (Alter) が自然の法則に従ってもたらすもの」[Haller [1755] 1993: 993] であって、自然との調和状態にある限り、なんら不都合をもたらさないものとされている。Siebold は、「高齢において月経は、女性のオーガニズムの正常な法則に従えば、わずかな障害もなく、いや、ほんのかすかな不快な痛みの感覚や苦痛もなく、消えていくものである」[Siebold 1821: 350] と述べ、さらに別の医学事典でも「すべての機能が相互に適切な関係にあるならば、障害はおこらない」[Gräfe et al. 1840: 208] とされている。

しかし、同時に、「正常」なプロセスを迎れば「障害」が起こらないという前提は、「障害」が逸脱の結果だという判断にもつながる。ここで言う逸脱には、「月経の終了」が早すぎたり遅すぎたり、あるいは急に止まったりすることも含まれており、それらはときに恐るべき結果をもたらすとされていた [Osthoff 1804: 95; Mende 1810: 137]。また、多くはそれまでの人生における女性本人のモラル違反に起因するほか、「次第に増していく贅沢や、時代のさまざまな悪条件のために、女性のオーガニズムに有害な影響が少なからず作用」[Siebold 1821: 350] するという文明批判の文脈ともつながっていく。本来自然の導きによれば起こらないはずの症状の出現が、ここで担保されるかたちになっている。

(3) 生命力節制の規範

「月経の終了」時はそれまでの人生のあり方が問われるという点で、女性の人生の「総決算期」であったといえることができる。意味が付与されるのは、「月経の終了」そのものではなく、それまでの行為や振る舞いである。

……遅く結婚した人は、とくに子どもを産んでいない場合、早く結婚した人よりもたいてい生理が長く続く。とても早くから頻繁に出産すると、たいてい生理は真っ先に止まる。そして、自分で授乳したり、出産の際に大量の体液を失ったりするほど、早く止まる。成熟期に入るのが早いほど、月経は早く終わる。[Osthoff 1804: 105]

……寒い地方では月経が終わる時が始まるのが遅く、女性の生殖能力が長く続き、また同じように、健康で、節度があり、よく働き、あまり感情が激しくない女性の場合もそうである。大体において、月経はそれが早く始まるほど、早く消えていくという法則がかなりあてはまる。[Pierer [1823] 1994: 160]

19 世紀前半のパラダイムにおいて、閉経することは、すなわち「老人」になることであった [原 2003]。早々に月経が終わってしまうことは「人生の凋落」を早く迎えることであり、ネガティブな意味をもつ。そのため、どのような振る舞いや行動が、早期に「老い」を引き起こすかという記述は、逆に、女性の行動規範がなんであったかを示すことにもなっている。また、上記のような例においては、女性の守るべき規範・モラルが呈示されているとともに、一種のエネルギー保存則が示唆されていることが注目される。出産や出血、授乳などはエネルギーを消耗する出来事として捉えられ、そうした消耗経験が多いほど月経は早くに尽きてしまうほか、月経が早く始まればその分早く終わる。Kondratowitz はこうした、各自が補充のきかない一定の生命力の蓄えを持ち、その蓄えが人生が進むにつれて不可逆的に減っていくという考え方を、銀行口座になぞらえ Kontotheorie (口座理論) として説明しているが [Kondratowitz 1989]、若い頃から節制

のきいた適切な生活をし、活力の無駄な浪費を抑えることは、18 世紀から 19 世紀初頭においては長命術の基本的な考え方でもあった。「閉経」にともなう一連の記述も、こうした一般的な枠組みに従っているといえる。

（４）越境される「閉経」

では、「月経の終了」そのものは、どのような位置づけだったのか。西欧 18 世紀から 19 世紀前半にかけて支配的だった月経モデルは、女性は自分の身体を養う以上に血液を作ることができ、妊娠時にはその血液が胎児を養う栄養物に、授乳時は母乳に変わるが、それ以外のときは不要で過剰となるため排出されるとする「多血」(Plethora) モデルである [Stolberg 1999, 2005]。このモデルでは、月経は「生殖可能であることを開示する現象」として捉えられてはいるが [Siebold 1821: 49-50; Busch 1839b: 646]、両者の因果関係は明らかではない。このモデルにおいて月経が終わるということは、身体が余剰物を作れなくなることと同時に、体内器官の老化萎縮により月経の通り道が塞がることに起因する。しかし、血液は経路が塞がってもしばらく余剰であるために、体内で出口を求めてさまよい、様々な症状の原因となる。早い「閉経」、あるいは突然止まる月経は逸脱であり、危険視される。しかし、プロセスが正常であれば自然が出口を探すのであり [Mösl 1782: 199]、そこから「代償月経⁽²⁾」の必要性が生じてくる。たとえば Friedrich Ludwig Meissner は、月経の消失とともに、身体の「様々な穴から水分が出てくること」を指摘しているが、これは、通常と異なる経路が模索された結果、水分が月経の代わりに排出されるという現象を示している [Meissner 1845: 915]。

この解釈において注目すべき点は、こうした代償月経が、病気を避けるために「自然」が起こす正常な身体作用だとされているところである。「自然」が起こしたものである以上、汗や尿などの形で身体中のさまざまな穴から水分が大量に排出されるという現象は、決して「障害」ではない⁽³⁾。また、高齢期における月経再開も否定されておらず、「60 歳から 80 歳、また 90 歳まで生きている女性に月経が再び出現するという現象」は、「大変年をとったひとに新しい歯が生えることと同様」の、自然の力による「若返り」だとされ [Bernstein 1795: 92; Alexander 1841: 67-8]、月経再開後新たに生殖力が備わる例も認められている [Pierer [1823] 1994: 160]。こうした高齢での「月経再開」や「受胎」説は懐疑と交じり合いながらも、完全に否定されずに 19 世紀半ばを過ぎるまで続いている。

このような、高齢での「月経再開」や「妊娠」、また「代償月経」は、「閉経」がもつ絶対性の欠如を示唆している。いったん月経が終了しても「代償月経」という月経の類似物が継続したり、高齢になってから月経が再開して再び妊娠できるという認識枠組みにおいて、「閉経」という境界線は、月経が終わるという現象そのものとしても、また「生殖能力」の喪失を呈示するという機能の点でも、非常に曖昧であり、たやすく越境されうるものであったといえる。

4. 「閉経」をめぐる言説——19 世紀後半から 20 世紀初頭まで——

こうした「閉経」をめぐる言説は、19 世紀半ばをおおよその境に、相前後しつつ変化していく。この章では前章と同じく医学事典・医学書における「月経の終了」に関する記述から、こんどは 19 世紀半ば以降の言説の特徴を、前章と対応する 4 つの軸に則する形で抽出していく。

(1)「衰退」からの独立

19世紀前半には性的活動の減退が総体としての「衰退」の枠組みと渾然一体となっていたが、19世紀後半になると、月経終了とそれに伴う変化は、全体の「衰退」から独立していく。月経終了に伴う変化の描写は生殖器官のものに限定され、全身の「老化」プロセスとは明確に異なる枠組みを持つようになり、1870年代には生殖器官の変容自体を、Klimakteriumの変容と老年期のそれとに厳密に区分しようとする文献も現れる。Das klimakterische Alter（更年期）を表題とした専門書を出した Heinrich Kisch は、それまでの婦人科医学の文献が外性器の退行、萎縮などを「月経終了時における変化」として挙げていることを批判し、「こうした状態は、更年期においては確認されない。これらは、かなり前から退化が生じ、老年性の組織変化が起こっているような、はるかに高齢の女性に見られるものである」[Kisch 1874: 86]と述べ、月経終了時の変化と高齢期における変化を明確に区別する姿勢を打ち出している。また、Albert Eulenburg 編集の医学事典では、性的器官の機能的活動の消失と老年期（Greisenalter）の始まりとの間には「まだ20年から25年の期間が横たわっている」[Eulenburg [1903] 1993: 124]とされている。こうしたことから19世紀末には「月経の終了」と「老年期」との距離が、内容的にも時間的にも開きつつあったといえるだろう。

このことには、前章の(1)で述べた、人生後半をひとつの下り坂として捉える「人生曲線」モデルの揺らぎが関わっていると考えられる。同様に、第二章で考察した、男女両性の人生の各所に位置する複数の「変節点」であった Klimakterium が、特定の一時期、すなわち女性の「閉経」を含む時期だけを意味する言葉へと変化していく動きにも、この理念型の崩壊が影響していると考えられる。なぜなら、自然誌的な「人生曲線」においては、「初経」と「閉経」はシンメトリーな構造の左右の対であり、両者は同じだけのインパクトをもつ必然性があるからだ。右側に位置する「閉経」だけが Klimakterium として肥大していくことは、このシンメトリーな構図が崩れていることを示唆している。

(2)「障害」の包摂

19世紀の前半までみられた「本来あるべき自然状態」という「調和」の規範は、19世紀後半になると薄らぎ、「閉経」に伴っておこる数々の「障害」や「症状」は、逸脱ではなく「月経の終了」に本質的に付随するものとして包摂されていく。1886年に Wechseljahre を表題とする専門書を出した Ernst Börner は、Klimakterium を女性の性的な活動が消えていく期間と措定したうえで、それにもっとも適合する基準として、それまで「出血の不規則な間」とする傾向があったのを排し、「Klimakterium の症状」の開始から終了までを Klimakterium とすることを提唱する [Börner 1886]。この主張によれば、最終的な月経の終了とともに終わるとされてきた Klimakterium の期間は、「閉経」をはさんで前後に伸張することになる。これは、「更年期症状／障害」自体が「更年期」を定義するという論理であり、時間の幅をもつ「更年期」そのものが、「症状」の取り込みによって形成されていくことを示している。しかし、何が「更年期症状／障害」とされるかによって、その拡大は理論上無制限でもある。

19世紀前半において「月経の終了」は「老年期」のメルクマールであり、緩やかとはいえ「成人期」と「老人期」を区切る境界線であったのに対し、前後にこのような時間の広がりをもつことによって、「閉経」は「老年期」のメルクマールという役割を、直接的

には果たさないものとなっていく。一方、「閉経」を包摂した「更年期」は、「成人期」と「老年期」のあいだの、中間ステージとなる可能性を帯びる。

（３）再生産活動の推進

女性の人生の「決算」が月経の終了時に行われるという傾向は、19 世紀後半になっても続いていくが、そこで示される行動規範は、19 世紀前半までのものとは明らかに異なったものになる。19 世紀前半までは、手持ちのエネルギーを早々に使い果たさないことが重要とされた。これに対し、19 世紀後半には、女性が自らの生殖機能を十分に使い切ったかどうかということが評価基準となっている。

月経の終了と性的生活（Geschlechtsleben）の消失が早いか遅いかについては、女性の性的活動の多寡、とくに、出産の頻度と、授乳の状態が影響する。我々の研究の確かな結果として、健康で力強い体つきである場合、月経が常に定期的で十分に量があり、性的器官も十分に使用され、多くの子どもを産み、自ら授乳した女性が、その逆の立場の女性よりも月経機能がはるかに長く続き、月経の終了がはるかに遅いと主張することができる。[Kisch 1874: 32-3]

性的機能が十分な活力をもつことの証拠は、子どもをたくさん産んだり自ら授乳するという性的活動を多く行うことである。月経が早く始まることも性的活力が大きいことの表れであり、初経が早いほど月経は長く続くとされる。こうした傾向は、19 世紀前半までのようなエネルギー節約を薦める考え方から 180 度の転換であるといえる⁽⁴⁾。

（４）「閉経」の不可逆性

それでは「閉経」自体の位置づけはどのように変わったのか。19 世紀中ごろになっても排卵による月経の仕組みは知られないままであったが、1840 年ごろより卵巣の周期的な変化が月経との関連で注目されるようになり [Stolberg 2005]、同じ頃から月経の原因を「多血」状態に見るモデルが一部の医学書により疑問視され始める [Gräfe et al. 1840: 145; Meissner 1842: 26-7]。それと並行して、19 世紀初頭までは肯定されていた「高齢になってからの出血」は、ある種身体に有益なものであるという認識のまま、「本当の月経ではない」[Gräfe et al. 1840: 210] とされるようになる。また、代償月経による妊娠の可能性も、19 世紀後半を通して徐々に否定されていく。こうして、やがて Pflüger が 1865 年に提唱する「排卵」モデル [Hering u. Maierhof 2002: 31] の広がりとは並行するかたちで、19 世紀前半まではさまざまなベクトルや形態を持ち得た月経が曖昧さを残しつつもリジッドなものになるとともに、流動的だった「閉経」は不可逆的な出来事となる。同時

表-1 「月経の終了」をめぐる 19 世紀半ばを転換点とした認識の変化

	主題	18 世紀末～19 世紀半ば	19 世紀半ば～
1	(A)「総体としての衰退」と (B)「性的機能の後退」との関係	(A)は(B)を包括する (B)は(A)と切れ目なくつながる	(B)が(A)から独立、前景化する
2	月経の終了時に現れる「障害」の 位置づけ	逸脱に起因する	本来月経の終了に付随する
3	再生産活動への動機付け	生命力の節約を示唆	生殖活動を奨励
4	「閉経」の位置づけ	曖昧で越境可能	不可逆的

に、「生殖」する身体としない身体のあいだの越境が不可能になっていく。

こうした認識枠組みの変化を整理すると表-1 のようになる。ただし、言説の転換は実際には 19 世紀半ばをもって一斉に起こるわけではなく、それぞれの項目によってある程度前後するうえ、医学書によっても認識にズレはある。しかし、大きく見た場合このような構造が現れてくるということが筆者の考えである。

5. 結論

以上、本文で述べてきたことをまとめると、次のようになる。19 世紀前半には、月経が終了することに伴う性的能力の後退と総体としての衰退がはっきりと分化されていなかったのに対し、世紀後半では性的機能の後退が前景化し、両者は分離し始める。また「閉経」は「障害」を包摂することで時間の幅を獲得していくが、そのことによって、19 世紀前半に「月経の終了」が持っていた「老年期」開始の境界線を引くという機能は失われ、代わって「更年期」というものがひとつの独立した人生区分として現れる。そして、生命力を消耗し過ぎないことを説く 19 世紀前半に対し、後半では再生産活動の充足を奨励する言説が増加する。さらに、「月経」自体が流動的に解釈されていた 19 世紀前半に対し、後半ではそれがリジッドなものになり、「閉経」は不可逆なものになっていく。

こうした「更年期概念」の成立プロセスにおける言説の不連続性には、2 つの局面を読み取ることができるだろう。ひとつは、「生」についての古典的理念型の解体である。上に見てきたような転換は、19 世紀前半までの「人生曲線」や「口座理論」といった自然誌的な理念型による「生」の理解が終焉したところに起こっている。それまでのシンメトリな人間の「生」のモデルが消失したことによって、もはや「老いる」ということについての古典的解釈は説得性を保持できなくなり、人生後半および加齢についての新たな意味づけ、再編成が求められたのだとみることができる。同時に、「障害」を包摂して得られた「更年期」という時間的な幅、さらに身体器官の機能低下や変容の時間的推移への関心の高まりは、静的な空間的分類への関心から、継続的なプロセスとしての概念に対する関心への変移と読み取ることができよう。

もうひとつの局面は、再生産力の再定義という問題である。19 世紀前半まで全身の「衰退」の二義的現象であった性的機能の「後退」は、世紀後半になると全体の「衰退」から差異化され、前景化する。また、性的機能に関する行動規範も、生殖行動を推進するものへと変わっていく。「再生産 = 生殖行為」に対する社会の積極的な関与は、近代社会の特徴のひとつである。このような認識枠組みにおいて、女性のライフコース後半が再生産 = 生殖の文脈によって意味づけ直されたところに「更年期」概念形成の契機があったと考えられる。

こうした「生」と「性」に関する考え方の転換は、19 世紀における「近代的身体」観の成立と位相を同じくするものだと考えられる。Barbara Duden は、客観的で外側から制御可能な「近代的身体」というものが 18 世紀末頃に発生し、19 世紀のあいだに徐々に出来上がっていったと述べている。そして、それに伴って人間の身体に関する新たな捉え方が登場し、「再生産 = 生殖」するものとしての女性身体の意味づけ直しが行われたのだという。また、この近代的身体とは、ひとつの正統的な理解によって身体の定義が作り直される位相にあり、外界との境界が明確であり、自己完結性を持つ [Duden 1987=1994: 24-52]。それは本稿で言えば、19 世紀前半まで見られた身体やプロセスの可塑性が、固定し

た理解に収斂していくところに見られるものだといえる。

Duden は、こうした近代的な生殖を意味する「再生産」(reproduction) という概念が、「生産」(production) と対応する、女性に配分される領域として 19 世紀半ばに成立したのだと述べ、こうした変化が経済学的な要因とも連動しているものであることを示唆する⁽⁵⁾ [Duden 1987=1994: 49]。本稿で検討した「閉経／更年期」をめぐる言説の転換も、さらに他の社会的文脈との相関関係を含めた実証的な考察を必要とするだろう。それについては、稿を改めて試みることにしたい。

註

- (1) The International Menopause Society “CAMS Menopause-Related Definitions Term” (<http://www.imsociety.org/pages/camsdef.html>)
- (2) 「代償月経」とは、月経の代わりに身体のいずれかの部分から体液が排出されることを指しており、月経閉止後だけではなく、月経のある年齢においてもしばしば起こり得るものとされた。
- (3) 発汗は、現在北米で最も頻繁な「更年期障害」のひとつに数えられている [Lock 1993=2005]。
- (4) もっともその一方で、「性的なつきあいを非常に早く始める」といった性的行動規範からの逸脱や、「立て続けの出産」「重い産褥」などは更年期の到来を早めるとされたほか、売春婦も月経がとまるのが早いとされており [Kisch 1874: 38, 53, 70]、逸脱行為には負の意味づけがなされている。
- (5) ただし、近代的人間像の出現要因を経済学的要因のみに還元する Duden の説明は、不十分なものの批判もある [北澤 2001: 174]。

一次資料 (引用分のみ)

- Alexander, A. 1841 *Physiologie der Menstruation*, Hamburg: Perthes-Besser u. Mauke.
- Bernstein, J. G. 1795 *Handbuch nach alphabetischer Ordnung*, Tl. 2, Leipzig: Schwickert.
- Börner, E. 1886 *Die Wechseljahre der Frau*, Stuttgart: Enke.
- Brockhaus 1812 *Conversations-Lexicon*, 2. Aufl., Bd. 1, Leipzig: Brockhaus.
- 1814 *Conversations-Lexicon*, 2. Aufl., Bd. 4, Leipzig: Brockhaus.
- 1817 *Conversations-Lexikon*, 4. Aufl., Bd. 2, Leipzig: Brockhaus.
- 1878 *Conversations-Lexikon*, 12. Aufl., Bd. 9, Leipzig: Brockhaus.
- Busch, D. W. H. 1839a *Das Geschlechtsleben des Weibes*, Bd.1, Leipzig: Brockhaus.
- 1839b *Das Geschlechtsleben des Weibes*, Bd.4, Leipzig: Brockhaus.
- Eulenburg, A. (hg.) [1903] 1993 *Real-Enzyklopädie der gesamten Heilkunde*, 3. Aufl., Bd. 23, Erlangen: Fischer. [Microfiche]
- Gräfe, C. F. et al. (hg.) 1840 *Encyclopädisches Wörterbuch der medicinischen Wissenschaften*, Bd. 23, Berlin: Boike.
- Haller, A. [1755] 1993 *Onomatologia medica completa*, Bd. 1, Erlangen: Fischer. [Microfiche]
- Kisch, Heinrich 1874 *Das klimakterische Alter der Frauen*, Erlangen: Enke.
- Meissner, F. L. 1842 *Die Frauenzimmerkrankheiten*, Bd. 1, Leipzig: Wiegand.
- 1845 *Die Frauenzimmerkrankheiten*, Bd. 2, Leipzig: Wiegand.
- Mende, L. J. C. 1810 *Die Krankheiten der Weiber*, Tl. 1, Leipzig: Salfeld.
- Mösl, V. 1782 *Medicinisches Hand-Lexikon*, Bd. 1, Augsburg: Wolf.
- Osthoff, H. C. A. 1804 *Untersuchungen über die Anomalien der monatlichen Reinigung*, Lemgo: Meyer.
- Pierer, J. F. (hg.) [1823] 1994 *Medizinisches Realwörterbuch*, Bd. 5, Erlangen: Fischer. [Microfiche]
- Siebold, E. 1821 *Handbuch zur Erkenntniß u. Heilung der Frauenzimmerkrankheiten*, Frankfurt: Varrentrapp.

参考文献

- Bell, Susan E. 1990 "The Medicalization of Menopause," Ruth Formanek (ed.), *The Meaning of Menopause: Historical, Medical, and Clinical Perspectives*, Hillsdale: Analytic Press: 43–63.
- Duden, Barbara 1987, *Geschichte unter der Haut: Ein Eisenacher Arzt und seine Patientinnen um 1730*, Stuttgart: Klett-Cotta. 井上茂子（訳）『女の皮膚の下：18世紀のある医師とその患者たち』藤原書店 1994.
- 原葉子 2003 「〈老人女性〉をめぐるまなざし：ドイツ 19 世紀～20 世紀初頭の百科事典と医学事典から」『お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム〈誕生から死までの人間発達科学〉平成 14 年度公募研究成果論文集』187–197.
- Hering, Sabine u. Maierhof Gudrun 2002 *Die unpässliche Frau*, Frankfurt: Mabuse.
- 北澤一利 2001 「近代の身体と健康概念の歴史性」『環』7: 171–182.
- Komesaroff, Paul A. 1997 "Medicine and the Moral Space of the Menopausal Woman," Komesaroff P. A. et al. (eds.), *Reinterpreting Menopause: Cultural and Philosophical Issues*, NY: Routledge: 54–74.
- Kondratowitz, Hans-Joachim v. 1989 "Die Medikalisierung des höheren Lebensalters," Labisch u. Spree (hg.), *Medizinische Deutungsmacht im sozialen Wandel des 19. u. 20. Jhs.*, Bonn: Psychiatrie: 207–222.
- Lock, Margaret 1993 *Encounters with Aging: Mythologies of Menopause in Japan and North America*, Univ. of California. 江口重幸他（訳）『更年期日本女性が語るローカル・バイオロジー』みすず書房 2005.
- McCrea, Frances B. 1983 "The Politics of Menopause: The 'Discovery of a Deficiency Disease,' " *Social Problems* 31(1): 111–123.
- Panke-Kochinke, Birgit 1998 *Die Wechseljahre der Frau: Aktualität u. Geschichte 1772–1996*, Opladen: Leske.
- Schipperes, Heinrich 1978 "Natur," Otto Brunner et al. (hg.), *Geschichtliche Grundbegriffe: Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland*, Bd. 4, Stuttgart: Klett-Cotta: 215–44.
- Stolberg, Michael 1999 "A Woman's Hell? Medical Perception of Menopause in Preindustrial Europe," *Bulletin of the History of Medicine* 73(3): 404–428.
- 2005 "Menstruation," Gerabek et al. (hg.), *Enzyklopädie Medizingeschichte*, Berlin: Gruyter: 971–2.
- Wilbush, Joel 1979 "La Menopausie: The Birth of a Syndrome," *Maturitas* 1: 145–151.
- 山本祥子 2001 「更年期：医療化された女性の中高年期」黒田浩一郎（編）『医療社会学のフロンティア：現代医療と社会』世界思想社: 193–216.

（お茶の水女子大学大学院・博士後期課程 XXXXXXXXXX）